

## 縦横

この4月、77億円の巨費を投入して行われた全国学力テスト。その結果が10月文科省から発表された。山梨県の児童・生徒の「学力」は全国とほぼ同水準。基礎知識を問うA問題の正答率は82-71%と高かったが、知識の活用力をみるB問題は60%台と低迷していた。ただし、これも全国的傾向とほぼ同様であったという。

この「事件」にはいくつか「異論」を挟まざるを得ない。まず、「学力とは何か」、「学力は何のために必要か」という問題が不問に付されたまま実行に移されたことだ。事の起こりが、時の文部大臣の私的な思い入れであり、それもOECD調査の解釈に係る見当違いから出発しているらしいこと。ようやく軌道に乗り始めた矢先の「ゆとり教育」への思想的反発と、安倍内閣のナショナリズムとの合体でもあったことである。

教育成果を調査し、その結果を教育行政に生かすというのなら、巨費を投じて悉皆調査をする必要は全く無い。統計学の教えるところでは無作為抽出したサンプル調査で十分である。ここには学校間で競争させようという意図がみえみえだ。結果、教育現場には点取り主義がはびこることになるだろうし、すでに足立区の「誤答修正指導」という学校ぐるみのカンニング事件が起こっている。

こうして出てきた結果はほとんど予想通りのものであった。単純な知識をたずねた設問Aでの高得点、その知識を応用して実際の場面で使うリテラシーを問う設問Bでの不出来。これこそOECDの国際学習到達度調査PISA2003が指摘していた事態だったのであり、この不出来は全国統一の学力調査という文化、つまり、一列に縦に並べる序列化という明治以来一貫したこの国の教育観が創出した悪果なのである。

この種の失敗には先例がある。大学入試における「入試センターテスト」がそれだ。全国一律の問題で「学力」を問う。全国の同一年齢の若者が一斉に鯉の滝登りのように一列になって川を遡上する。その先は水の無くなる水源にしか辿り着かないというのにである。そして、こういう姿は戦前の徴兵検査とどこか通底していないだろうか。

